

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	20221003	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	アジア途上地域におけるPOPs候補物質の汚染実態解明と生態影響評価	研究代表者 (所属・職)	田辺 信介（愛媛大学・沿岸環境科学研究センター・教授）

【平成23年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>発展に伴い化学物質の管理が課題になるアジア途上地域を対象として POPs 候補物質による汚染物質の実態解明、動態解析、生物濃縮、経年変化を明らかにするという研究の目的は着実に達成されている。多数の物質を網羅的に分析及び追跡し、生態影響を明らかにする本研究は、これらの物質の動態解明で大きな貢献をしており、学術誌への発表もきわめて活発である。従来からの研究の成果を更に発展させる研究として世界的な水準から見ても十分であり、多くの貴重な知見が蓄積されてきている。研究計画に沿って更に研究を発展させることによって、環境改善施策への反映が可能になるような研究成果を得ることが期待される。</p>	

【平成25年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価と比べ、十分進展した研究成果であった。
A+	<p>当初目標を着実に達成したのみならず、未知毒性物質の検索同定手法を実試料へ適用可能な段階まで高度化したこと、途上国に PBDEs やその代替物質の汚染源の存在や水銀の長距離輸送性を確認したこと、多様な生物種について POPs 候補物質の代謝物の蓄積を網羅的に解析して斬新な成果を得たこと、野生動物の受容体遺伝子を用いた POPs 候補物質のリスク評価系を確立したこと、POPs のみならず、レアメタルや水銀等の微量元素の歴史的トレンドを明らかにしたことなど、当初の目標を超える、斬新で、先駆的な成果が国際誌に数多く発信された。</p> <p>また、ストックホルム条約締約国会議の報告書に本研究結果の一部が引用されるなど、国際機関や関連する各国政府への行政施策と環境改善方策に大きな波及効果をもたらした点も当初目標を超える成果であったと評価できる。</p>